

ビジュアル系
子ども・家族の
理解と支援

十二 寄木細工の臨床備忘録
〜手立て〜



家族援助あれこれ

四〇数年の間にあちこちで学んだ知識や技術をもとにした寄せ木細工の家族臨床その補修をかねて見立てと手立てを見直してきました。

最終回は、“問題”とされるものへの手立です。

いつものように、マンガは作者の団士郎氏の許諾を得て木陰の物語と家族の練習問題から転載しています。

見立てと手立ての間に、「心の痛みの緩和」という手順をはさみます（以下の①～④）。局所麻酔に通じるところがあるかもしれません。



① ねぎらい.. 成果
のでなかった解決
努力も含め、てい
ねいにねぎらう。
② 強み.. 弱点やリ
スクと違い、多く
の場合、家族は自
分たちの強みなど
信じていない。そ
れを見つけて共有
する。



③ 困りごと…たとえ本題から離れていても、いかに援助者側が切羽詰まっけていても、現に困っていると言われることを取り上げる。

④ 雑談…一般に、日常会話・世間話・噂話など何気ない雑談には癒しの力がある。ある種の準備運動として、そこに時間を割く。

次いで手立てを考えますが、「何が問題か」というより、「どんな文脈で、何を問題としているか」に注意を向けます。



- “問題”の文脈
- ① どんな文脈でそれを問題とみなしているか？
 - ② その根拠はなにか？
 - ③ その文脈に沿ってどんな解決努力をしているか？

効果がないにもかかわらず、特定の文脈による解決努力を続けると（パターン化）、逆にそれが“問題”を維持強化することになります。



“問題”を維持強化している解決行動を止めるには、“問題”たらしめている文脈自体の変化が必要です。

というわけで、
「文脈」を変える、
もしくは新しく「文
脈」を作る支援を考
えます。

その際、文脈を支えて
いる「根拠」と矛盾する
事実、見逃していた事実
に到達すると、その書き
換えはスムーズに運びま
す。

役割の固定化



また、パターンの一部を変えて、関係者間の相互作用に変化をもたらすのもアリです。

たとえば、“問題行動”と解決努力が織りなすパターンにおける役割・意味・形式などを変えるとか。

おわり



おつかひさま